

骨考古学分科会シンポジウムS7 骨から顔を読み取る―復顔研究の最前線

オーガナイザー：奈良 貴史

10月10日（15：30～17：30）A会場

近年遺跡から出土する人骨に対しては、従来の古典的な形態学的分析の他、DNA解析、安定同位体分析、年代測定などの多方面から検討が企てられ、これまで以上に多くの事実が明らかになってきている。しかしながら、研究に用いられる人骨その個体が生前どのような顔つきをしていたか復元する試みは、本来ならば人類学者が目指すものの一つであるはずなのに、けっして活発とは言えない状況である。今回、復顔を実際におこなっている研究者を一堂に集め、研究の現状と課題を議論し、今後出土人骨の復顔が一般的になることを目指す。

講演

趣旨説明（奈良 貴史）

S7-1 貴族形質にみる頭蓋骨と顔貌の形状比較（戸坂 明日香）

Comparison between the skull and facial appearance of the physical characteristics of the Japanese aristocrats (Tosaka, Asuka)

S7-2 貴族形質を持つ個体の復顔（川久保 善智）

Facial reconstructions of the individuals with aristocratic traits (Kawakubo, Yoshinori)

S7-3 郷土の偉人・小林虎三郎の復顔像に関する検討（波田野 悠夏）

Three-dimensional facial reconstruction from the Torasaburou Kobayashi's skull, in Nagaoka City, Niigata Prefecture, Japan (Hatano, Yuka)

S7-4 未成人頭蓋骨の復顔（宇都野 創）

Archaeological Facial Reconstruction from Juvenile Skull (Utsuno, Hajime)

S7-5 相同モデルを使った復顔（谷尻 豊寿）

Forensic facial reconstruction using homologous modelling (Tanijiri, Toyohisa)

S7-6 自己の骨および軟部組織データからの復顔（高見 寿子）

Facial reconstruction from self bone and soft tissue data (Takami, Hisako)